



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1798-1847年におけるロシア文学とウクライナ文学の交錯：ウクライナ・コサック表象に注目して
Author(s)	上村, 正之
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16963号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16963
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99807
Type	doctoral thesis
File Information	Masayuki_Uemura_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 上村 正之

学位論文題名

1798-1847 年におけるロシア文学とウクライナ文学の交錯
——ウクライナ・コサック表象に注目して

本博士論文では、18 世紀末から 1840 年代までのロシア文学・ウクライナ文学作品、ならびに関連テキストを分析し、両文学が交錯する様相を描出した。この時期の特徴は、ロシア帝国の首都サンクト・ペテルブルグが共通の文壇として機能し、首都にてウクライナ人のウクライナ語作品も出版され、ロシア人もロマン主義時代の「ウクライナ愛好 Ukrainophilia」の流行の中でウクライナを題材に作品を書いた点にある。他方、当該時期における両文学・文化の非対称な関係（とりわけロシア中心主義的なウクライナの言語・歴史に関する言説）や、両文学が緊張関係を孕みながら自己形成していった点は十分に分析されてこなかった。本稿では、イワン・コトリャレウシキーの『エネイダ』（初版 1798）から、タラス・シェウチェンコがキリロ・メフォディー兄弟団に連座した年で逮捕された年（1847）までのテキストを対象とした。特に、ウクライナ・コサックの表象に注目し、両文学における歴史・民族・文学・美学に関する見方の差異を浮き彫りにした。

第 1 章では、ロシア帝国における「ウクライナ愛好」期のウクライナ（語）文学や文化の位置づけについて確認した。当時のヨーロッパのナショナリズムやロマン主義の勃興を背景に、ロシア文学においては「ナロードノスチ」（民族性・国民性）をめぐる議論が展開された。ハルキウ出身のオレスト・ソモフによる文学論「ロマン主義詩について」（1823）には、ロシア帝国を多様な地方・民族の集合とらえ、ウクライナもそうした地方の一つに数え入れつつ、ロシア語作家がそれら周縁的な地方・民族を題材にして「国民文学」を創出することを訴えるという、一種のねじれが確認された。またベリンスキーは初期の批評において、ロシアの「ナロードノスチ」および国民文学の創出の手段として、現実生活の描写に基づく「リアリズム」を提案しつつも、ゴーゴリの「ウクライナもの」作品を高く評価した際は、ウクライナの「ナロードノスチ」を描出する「リアリズム」よりも、ゴーゴリの芸術的独創性を重視して、彼を「プーシキン後のロシア文学の^{かしら}頭」と評した。このように、同時代のロシア文学においては、ウクライナはあくまでも描かれる客体に留まり、ロシア文学の関心はそれ自体の主観性・独創性・「ナロードノスチ」にあった。

第 2 章では、ウクライナ近代文学の嚆矢である『エネイダ』を取り上げ、民衆的バロック文化に起源をもちつつ、古典主義の「低位」のジャンルに位置するパロディ

叙事詩の形式で展開された世界観について分析した。ウェルギリウスの『アエネーイス』をウクライナ風にパロディし、ウクライナ文化の百科事典とも評された同作品は、民族誌的な細部に富みつつも、18世紀までのヘーチマン国家時代へのノスタルジアも表明されている。ロシアの文壇で「ナロードノスチ」という語が議論される以前から、より明示的な形で民族性が展開されていることを確認した。

第3章では、ロシアの劇作家シャホフスコイによるボードヴィル『コサックの詩人』(1814)と、それへの批判的応答であったコトリャレウシキーの戯曲『ナタルカ・ポルタウカ』(1819)を分析した。その際、1775年に廃止されたザポロージェ・コサック軍団から、皇帝からの恩恵により再編成された黒海コサック軍団の長アントン・ホロワーティー(1744-1797)の詩を手掛かりに、ウクライナ・コサックが帝国にたいしていかに「忠義」な存在として表象される必要があったかを考察した。コトリャレウシキーにおいては、ウクライナ人の帝国への忠実さがアピールされつつも、ロシア人のウクライナへの無知が批判された初期の例でもあった。

第4章では、デカブリスト作家であったフョードル・グリンカ、コンドラーチー・リュレーエフとプーシキン『ポルタワ』を比較した。共和主義的理想を前景化するデカブリストにおいて、ボフダン・フメリニツィキーやイワン・マゼーパは、汎ヨーロッパ的な自由・解放の英雄として描かれた。リュレーエフ『ヴァイナロフスキー』(1825)は、前書きや注にて公式的なマゼーパ=裏切者の言説を歴史的事実として提示しつつも、物語中ではマゼーパをウクライナの解放の英雄として描いた。これに対して、デカブリスト蜂起鎮圧後に書かれた『ポルタワ』(1829)は、公式言説と矛盾しない形で「悪人」マゼーパを描き、作中の出来事が当時の帝國的バイアスがかかった史料や歴史観に基づいている点を確認した。

第5章では、ロシアの帝國的ナショナリズムの発露として解されがちであったニコライ・ゴーゴリ(ムィコーラ・ホーホリ)『タラス・ブーリバ』(1835初版/1842改稿版)について、近年の研究成果をもとに修正を試みた。とりわけゴーゴリが未刊行の断章「マゼーパの瞑想」(1834-35)のようなテキストにて、ロシアに脅かされるウクライナの^{ナツィオナーリスチ}「国民性」を記述したり、同時代のウクライナ人によるテキストに通じた点は重要であった。『タラス・ブーリバ』改稿版にて頻出し、邦訳では「ロシアの」「ロシアの地」と訳されてきた *русский, русская земля* という語にしても、同時代のウクライナ人の用語法と、作中のコンテキストを照らし合わせると、「ルーシ(の地)」=ウクライナと解することが可能である。また、作中でタラスが放つ演説や、最期の瞬間に述べる予言についても、同時代のウクライナ・ナショナリズムの観点から解釈しうることを示した。

第6章では、ロシア文学史とロシア思想の形成に大きな役割を果たしたベリンスキーによる、シェウチェンコらウクライナ語作家に対する批判とその応答を取り上げた。1840-1843年頃にかけて、ベリンスキーはウクライナ語作品やウクライナ人による

歴史記述に対し、ヘーゲルの歴史哲学を借用して、国家なき民族の「文学」や「歴史」の不可能性を『祖国雑記』誌上にて展開した。これに対し、シェウチェンコは物語詩『ハイダマキ』（1841）で、「ウクライナ語散文の父」と評されるクヴィトカ＝オスノヴァネンコは雑誌編集者への手紙の中で、のちにキリロ・メフオディー兄弟団の指導者となるコストマーロウは論説において反論した。さらに、1847年に官憲に押収された「未刊行の『コブザール』序文」（1847）は、当時のジャーナリズムへの批判が展開され、新しいウクライナ文学のマニフェストと位置付けられうる。

結論部では、これまでの議論を概括し、第一にデカブリスト蜂起が鎮圧された1825年が両文学の交錯において大きな転換点になった点を指摘した。これ以後、共和主義的な自由の担い手および歴史的主体としてのコサック表象は不可能になり、代わってヒエラルキーが特徴のロシア／ウクライナ観が支配的になった。第二にロシア人によるウクライナ文化・歴史への無知や、帝国内の他民族の主体性を軽視する帝國的知のあり方が、しばしばウクライナ人からの反論を呼び起こし、ついにはロシアと共通の文学空間からの「分離」を引き起こした。こうした両文学が交錯するダイナミクスは、ウクライナ人のテキストに隠されたアイロニーや、私的な手紙・未公刊作品などの言表、また帝国内では比較的マイナーな媒体（文芸雑録^{アリマナフ}など）の記述を通して明らかになった。